

# 親 草 庵 漫 筆

川 崎 正 悦

## 珍奇の名を競う植物の数々

(雅号改名の弁。過日望津に植物採集に行くバスの中で柴井先生にヒヤカサレたかカラカワレたかしましたが、又楼号か庵号を変えました。これは心境の変化だから止むを得ません。それに雅号はいくら変えても税金もかゝりませんし安心なものです。で前の酔夢楼と云うのは、私の様な凡夫は酔生夢死であると云う表面の意と、私は酔う事も好きであるが、まだ夢もあると云う裏の意味もあつて楼号とし板に彫つて額とし、玄関にかゝげたのでしたが、もう寄る年浪で酔う事もあまり好まなくなり、夢もなくなりました。然しまだ86才で富士登山を決行しようとする位の希望はありますが、それ位の夢で、もう大して欲もありません。只々草に親しんで暮らすだけなので「親草庵」と号する事に致しました。こゝで親草と云うのは、本草と云うのと同じで、草だけの意でなく木も含めての意味です)

### 1. アカンボウ

アカンボウと云つても人間の赤ん坊ではない。菌類にも赤ん坊がある。それはクリタケの一名である。クリタケは一名キジタケとも云い、秋季クリ、ナラ等の潤葉樹の朽ちた切株に叢生する草で蓋は赤褐色で、中央部は濃く蓋の下部も蓋部に似て、柄の色は最初は白いが、胞子が熟するに従つて、褐色になる食用草である。これによく似た種類にニガクリタケと言う毒草があつて、往々誤り食つて中毒する人がいるがこれは、蓋の中央部が赤褐色であるから、其地色に注意するとすぐ区別が出来る。

### 2. アオバナ

アオバナと云つても鼻汁垂小僧の青鼻汁の事ではない。夏の路傍の朝を美しく彩るツククサの一名である。太田南畝の「一話一言」巻の23に鴨路草、和名ツククサ、又ツククサ、又アオバナと云、讃岐の方言カマツカ、近江彦根方言コンヤタラウと云、在所に多し、花碧色なり(中略)近江栗太郡山田村産、葉の長さ6、7花卉の大きさ近し、土人多種て利とす。(筆者云うこれはオ、ボウシバナ)6月13日より7月13に至つて花を採の候とす。家を挙げて野に出て花を取り汁を搾り紙を染、是を青花紙と称して四方にひさぐ、其製伝あり。とある。こゝの青花紙はオオボウシバナで染めたのであるがツククサの花を搾りつぶしても染めることが出来る。従つてツククサと云うのも

月草でなく着草で、其液汁をすり付けて染めるの意である。ツククサは昔から摺衣に用いたので有名で「万葉集」巻7の柿本人麿の歌にも

つき草に衣は摺らむあさ露に  
ぬれての後はうつろひぬとも

があり、又巻10にも

つきぐさに衣ぞ染むる君が為め  
まだらの衣すらむとおもひて  
つき草に衣いろどりすらめども  
うつらな色といふかするしき

などがあるし「延喜式」に奉詣陵幣、鴨路草木綿20枚と記してあるのなどもツククサが古くから染料として使はれた記録である。

### 3. ジゴクノカマノフタ

キラソウの一名である。春の彼岸頃、路傍や堤の上又は石垣など、日当りのよい処に生える多年草で、茎は直立せず4方に広がつて匍つている。一寸釜の蓋を思はすので昔誰かが地獄の釜の蓋と名付けたものであろう。花も美しいので、いつか元町で1鉢30円で売つていた。葉にも茎にも毛があつて、葉は対生し、縁には粗い鋸歯があり倒披針形で往々紫色を帯びていることがある。

### 4. メグスリノキ(一名子ヨウジヤノキ)

カエデ科の植物で、山地に生ずる落葉喬木、高さ10mに達するものがある。葉は対生で3出葉、上面は稍無毛であるが、下面は特に葉脈に褐色の長絨毛を密生する。樹皮を煎じて洗眼料とするので眼薬の木の名がある。

### 5. フタリシズカ

「茶がかつた平床には、釣竿をかついだ鯛子和尚を1筆に描いた軸を閑静に掛けて、前に青銅の古瓶を据える。鶴程に長い頸の中から、すいと出る2茎に、十字と4方に囲ふ葉を境に、数珠に貫く露の珠が2穂宛、偶を作つて咲いて居る。」

「大変細い花ですね。——見た事がない。何と云ふんですか」

「是が、例の二人静だ」

「例の二人静?例にも何にも今迄聞いた事がないですね」

「覚えて置くがいい、面白い花だ。白い穂が乾度2本宛出る。だから2人静。謡曲に静の霊が2人して舞ふと云ふ事がある。知つているかね」

「知りませんね」

「2人静。……面白い花だ」

漱石の虞美人草の中に出てくる宗近親子の会話の1節である。2人静の描写が突にうまい。フタリシズカの和名の意味は、倭漢三才図会の湿草の部に「謡歌ニ云フ、静女ノ幽霊二人ト為リテ遊舞ス、此花ニ染相雙ビ艶美ナリ、故ニ之レニ名ク」とある。静女は義経の寵姫静御前の事である。フタリシズカは、裸花で花蓋片がなく、花後夏から秋にかけてよく閉鎖花をつける特性がある。雄蕊は1箇であるが、花糸が短かく3つに分れて内に曲つて子房を抱き、且つ各葯をつけている。フタリシズカに対して、ヒトリシズカがある。どちらもせんりよう科(ちやらん科)に属する。実はヒトリシズカの方が先で、それに対してフタリシズカがあるのであろうが、茲では漱石の文に釣られてフタリシズカの方を先に書いて仕舞つた。ヒトリシズカの花も裸花で、花卉がなく雄蕊は1箇であるが花糸は3分して白色糸状を呈し、水平に出ている。そして外側の2本だけ基脚の外側に葯をつけ、中の1本には葯がない。子房は1箇で花穂が1本だからヒトリシズカと云う。その語原についてはやはり倭漢三才図会に「静トハ源義経ノ寵妾ニシテ、吉野山ニ於テ歌舞ノ事アリ、好事者其美ヲ比シテ以テ之レニ名ク」とある。支那にも此れの一品があつて水晶花と云うそうだが水晶花の名も真にふさわしい。ヒトリシズカの葉は輪生に近く4葉が接して着いているが、フタリシズカのは上2葉と下葉が少し離れて着いているので、葉を見てもすぐ区別が出来る。又ヒトリシズカにはフタリシズカのような閉鎖花が出来ない。

#### 6. ヘビノネゴザ(一名カナクサ)

蛇の寝奠座の意味で、イヌワラビ、シケチシダ等に似たシダ類の1種で、山野の陽地にも陰地にも生えているが、東日本に多い植物である。葉の長さ15~40cmになり、蛇の寝奠座と呼ばれるのは、時に蛇が其の中に居る事があるからその名を得たわけである。又別名のカナクサと云うのは、金山や銀山に多くあるからだとの事である。

#### 7. ヘビノシタ

本州中部以北の高山帯に生ずる多年生の小形のシダである。本名はアキノハナワラビと云う。此植物はハナワラビ属で、ヘビノシタと云うのは、葉が1枚穂が1本であるところから蛇の舌が2叉に分れている有様に擬したものであろう。稀少な植物である。私は大正7年白馬山で採集したのを持つている。

#### 8. タヌキマメ

この花はたしかに誰が見ても狸の顔そっくりである。タヌキマメの名の示す通りマメ科の植物で野原に

生ずる1年草で、高さは20~60cmになり、あまり枝分れしないが勢のよいのは上部で幾つか枝を出す。葉は互生で披針形、表面は深緑で毛はないが裏面と茎には褐色の細い毛がある。葉柄はなく細い托葉がある。夏から秋にかけて茎の頂きに穂をなして多くの紫色の花をつける。狸豆と云う名は莢を覆う褐色の毛の多い萼の有様によつたものである。牧野富太郎博士の句に

さう言へばまもものは獣なり

花見れば庭に載えたい狸豆

下の句は( )してまだ誰も園内に作っていないと註がしてある。私も同感である。去る8月26日京都植物分類地理学会で尾鷲の九鬼地区の植物採集の帰途、第一行野浦のトンネルを出た処に突に生育のよいタヌキマメが沢山あつたので、種子を捜したがまだ時期が早くよく熟していなかつた。タヌキマメは1年草だから種子を取つて蒔くより仕方がない。絵に描いたものには、明治36年春陽堂発行の園芸文庫別巻「花間笑語」の表紙に三日月をあしらつたタヌキマメの面白い絵がある。

狸の名のついた植物には、やはりマメ科のコマツナギ属でタヌキコマツナギがある。これは琉球、台湾に産する。又食虫植物のタヌキモの仲間にはノタヌキモ、コタヌキモ、ヒメタヌキモ、ミカワタヌキモ、フサタヌキモ、イトタヌキモ、シヤクジイタヌキモなどタヌキの眷属が多い。皆タヌキモ科タヌキモ属である。カヤツリグサ科には、タヌキランとコタヌキランがあり、コタヌキランは亜高山帯の草地或は隙地に生じ、タヌキランは我邦中部以北の亜高山の多湿地に生ずる。ヒナノシヤクジイ科にはタヌキノシヨクダイがあり、この植物は四国の阿波に稀産する。タヌキノシヨクダイ属の植物は世界で南米に1種と日本に此1種を産するだけである。

#### 9. キツネノマゴ

狸の次には狐を出さんとうつりが悪い、狐の孫とは面白い名であるが、どうしてそんな名がついたのかさっぱり分らない。野原や路傍に生えている雑草で、茎は方形で高さ30cmばかりになり、葉は対生で長楕円形状の披針形で、夏から秋にかけて淡紫紅色の唇形花を開くがシソ科ではなく、キツネノマゴ科である。雄蕊は2本、雌蕊は1本で果実が熟すると2つに裂けて種子を弾き飛ばす。

或植物採集会の時、某高校の女生徒から此植物を問はれたので、これはキツネノマゴと答えたらその友達が横から、うちの学校の先生はタヌキノマゴと教えはつたわ。と言つた。さてそれは先生が笑談に言はれたか、間違つて言はれたか、生徒達がだんだん先生の云はれたことを次ぎ次ぎと伝えているうちに間違つたの

か分らない。間違についてこんな例がある。

これは私の学校の例であるが昆虫を採集に行つたときヒヨウタンゴミムシを教えたら、それが伝はつていくうちに、いつの間にかヒヨウタンチリムシになつていたことがある。ゴミとチリは同じ物でもヒヨウタンチリムシはない。又これも或植物採集会でヒメモチが口から耳え伝えられているうちにコモチになつていた事もある。だからタヌキノマゴもそんなことではあるまいか注意を要することである。狐の名のついた植物も又中々多い。まずキツネノマゴに近いものでは、その変種で琉球や台湾に産するキツネノヒマゴがある。この植物は、葉は小形で厚く、乾いて黒味があり、莖や苞の縁辺が透明膜質でないもの、又同じく琉球、台湾産で、葉、苞、莖、及花冠等に毛のないもの、これもキツネノマゴの変種でキツネノメマゴと云う。其の他キツネアザミは原野にあるごく普通のキク科植物で、よく人に知られたもの、キツネタンポは、タンポポ属の小形な植物で相模に産する。

キツネノボタンはキンボウゲ科の普通の野草、キツネガヤはイネ科植物で、南朝鮮、支那原産の帰化植物でスズメノチャビキ属である。ヒガンバナ科のキツネノカミソリ、ヤナギ科のキツネヤナギは周知の植物である。

#### 10. オノノヤガラ (一名ヌスピトノアシ)

林中に生ずる多年性の無葉爾で、莖は真直に立ち1米位に伸びる。其真直な莖を矢柄に見立て、林の中にあるから鬼の矢柄と呼んだものである。莖は其上部にある穂の様な花序と共に、黄色のものと黄赤色のものがある。地下には長楕円形の塊形があり、長さ10~18cmあつて、一寸ジャガイモの形に似ている。この塊形を足に見立て盗人の足と名付けたもの、山村の子供はこれを焼いて食べる。花期は6、7月頃。

#### 11. クララ

マメ科の植物で、クララと云う名は、其の苦い根の汁を嘗めるとくらくらと目眩をすと云うので名付けたとのことである。山野、土堤などでよく見受ける多年性の草で、若芽の時は萩に似ているので、縁日などではたちのよくない植木屋が萩の苗だといつて、これを売つていることがある。これは戦前の話であるが京都で或知人がその手にかゝつてクララを買つて来たことがある。莖は直立しよく成長すると、高さ90cm位になり、葉は奇数羽状複葉で、藤の葉を少し小さくした様な形である。花期は初夏で、多数の淡黄色の蝶形花を着ける。クララは漢方薬では五参の一つで苦参といふ健胃薬であるが又蛔虫駆除にも効くと云う。台湾では毒蛇の咬傷に内用するそうである。牛馬の皮膚に寄生する昆虫を駆除するには全草の煎汁を用いる。ク

ラ、は根にトマリンと云うアルカロイド約2%を含み、種子には脂肪油13%及少量の揮発性アルカロイド、シチジンを含有する。トマリンの皮下注射による致死野は家兔の体重1疋につき0.4瓦であると云う。

#### 12. ビンボウカズラ (一名ヤブカラシ)

これはブドウ科に属する植物で、よく藪の上一面に覆い茂つて藪を枯らすのでヤブカラシと云う。又大切な作物の上に茂つてそれを枯らすので、貧乏藪とも名付けたものである。多年性の攀縁草本で葉は互生し、鳥の足形をした複葉である。莖には稜があり、縦まゝに他の草木の上に蔓を延ばして之を覆い、名の通りこれを枯らして仕舞う。葡萄のようなあまり目立たない花を開くが実はあまり出来ない植物である。アオスジアゲハが好んでこの花に集つてくるからアオスジアゲハの採集には、花の時分ビンボウカズラの茂つている藪に捕りに行くがよい。

#### 13. ジイソブとバアソブ

ジイソブ、バアソブなんて云うと外国語のように聞えるが、これは木曾の方言で、老爺のそばかす、老婆のそばかすと云うことだそうである。どちらも葉や莖に、1種強烈な臭気があつてその生えている近くへ行くとその臭気でジイソブかバアソブがこゝらにあるなと云うことがすぐ知れる。この根莖を強壯薬に用いる。筆者の知人の老書家は六甲産のものを酒で用いて、よく効くと語られたことがある。然し此の人は植物採集中脳溢血で倒れた。ジイソブもバアソブも共にキキョウ科の多年性の草で、纏繞莖であるが右にも左にも巻いて、巻方は一定しない特性がある。葉は4枚ずつ相接して付いている。ジイソブの正しい和名はツルニンジンであるが、バアソブの方はこれが正しい名になつている。ツルニンジンは葉に毛がなく、鐘形の花は外側は白緑色で、内面には褐紫斑点があるが、バアソブの方は、葉に毛があり、花は内面濁紫色を呈している。両者共花は7、8月頃咲き、鐘形で長さ2cm内外、口縁は5つに裂けている。どちらもその花の内面の紫の斑点をそばかすに見立て、名付けたものである。

#### 14. バクチノキ

暖地に生ずる常緑の喬木で、葉は1寸、青木の葉に似ている。これはバラ科の植物で、樹皮が時を定めず鱗片となつて脱落するので、搏打に負けて裸にされるのに譬えたものである。葉脚の所に丁度ソメイヨシノにある様な蜜腺があるのが特徴である。バクチノキの新葉からばくち水(局方)を製し、杏仁水と同じく咳を鎮め、呼吸を鎮静にする薬とする。

#### 15. ショウベンノキ

小便の木の意で、鹿児島島の城山公園にある。中々珍

木で、方々にある木ではない。ミツバウツギ科の植物で、葉は3出複葉と単葉との両刀使いである。小さな花がすむと秋には、豌豆豆位の橙色の実が穂になつて出来る。此の木を切ると其切口から小便が出るように樹液が迸り出るので小便の木と云う名がある。

#### 16. ミサオノキ

暖地に生ずるアカネ科の常緑灌木で高さ2m位になる。葉は対生で長楕円形、厚くて光沢があり、葉の間には三角形の托葉がある。夏季黄色の花が咲き、果実は円く黒熟する。此の木はたとえあまり養分のないような岩の裂目に生えても、いつも青々としているので操の木と名付けたもので、その名付け親は牧野富太郎博士である。

#### 17. ブタノマンジュウ (一名カガリビバナ)

渡来の園芸植物で、サクラソウ科の球根植物である。シクラメン又はサイクラメンと云えば多くの人々が知っているが、ブタノマンジュウの名は知らぬ人が多い。球根が饅頭形で、伊太利のシ、リー島では、猪が好んでこれを食べるので猪のパンと呼ぶそうである。その事から日本では豚の饅頭ともじつて名付けたとの事である。又赤い花卉(今は白い花もあるが)が上方え反返えつて咲くので、それを火焰に見立て、篝火花とも呼ぶ。

#### 18. ボロボロノキ

九州の山地にある植物で、落葉小喬木、若い枝は紫色であるが2年目からは黄灰色に変る。小枝は冬になると強いものを残して葉と共に落ちる性質がある。然しそれでボロボロノキと云うのではない。ボロボロノキはボロボロノキ科で、日本では一科、一属、一種の珍らしい植物で、ビヤクダン科やヤドリギ科に近い植物である。葉は互生で卵形、長さは4~6cmあり、花は総状花序で雌雄異花、下部のものは雌花で、上方が雄花である。此の木の材は非常に脆くぼろぼろと折れ易いのでボロボロノキの名があると云う。

#### 19. ラノンケル

ラノンケルでは何の事かさっぱり分らないが、この名がダリアが日本に入つて来た時の名である。白井光太郎博士によれば、ダリアは天保13年に初めて輸入され、当初は和蘭名ラノンケルで通用したが、葉花共にや、牡丹に似ているので天竺牡丹と俗称したと「舶上花譜」に出ているとのことである。又ダリアと云う名は瑞典の植物学者ダールの姓に由て命名したものであると云う。

#### 20. サギノシリサシ

サギノシリサシと呼ぶのは、よく鷺の降りる様な湿地にあるので、鷺の尻刺の意である。フトイに似たカヤツリグサ科の植物で、海辺の泥湿地や原野の湿地に

叢生するサンカクイの一名である。此の植物は、多年性の草で、泥中に匍枝を引いて往々群を成して繁茂する。高さ50~90cm位になる。稈は直立して、3角柱を成すから、サンカクイが本名である。

#### 21. ノウゼンハレン

ノウゼンハレンと云うと、外国名の様に感ずるが、さに非ず、これはれつきとした和名である。其の花はノウゼンカズラに似て、葉は蓮の葉だと云う意味である。園芸の方では、金蓮花で通つている。よく緑日や夜店などでその鉢植えを見掛けるし、又花壇にも作られているごく普通の園芸花草である。もと南米ペルーの原産で、弘化年間に渡来した1年性の草である。ノウゼンハレンと云う1科をなす。一名ナスターチウムと云うのは、洋食に使うナダネ科のオランダガラシ別名ミズタガラシをナスターチウムと呼ぶのであるが、その植物の香いにノウゼンハレンも似ているので、これも同名で呼ばれるようになったとの事である。南方館補全集巻7、草花の話の項に「ノウゼンハレンは、ペルーの原産だが、其ハスの葉様の葉と、兜様の花を、古欧州の円桶と金兜とに見立て、トロペオラム(戦利品)と学名した。葉と実を塩と酢に漬けるとからし漬のような味がして、薬的に飯が進む。西洋料理のケンにも使う。夕方定期的に、その花から電光を出すのを、リンネの娘クリステナが創見したというから、多く植えて研究したら大國益になる件を見出すかも知れぬ」とある。それほんとかね!だ。原文にはノウゼンカズラとなつているが、ノウゼンカズラは支那原産であるし、トロペオラム属でもないし、葉の形も違うし、明かにノウゼンハレンのことであるので、筆者が勝手にノウゼンハレンとしたわけである。念のためその処を今一度書くと、5月の末に咲く草花と云う所に出ていて「ノウゼンカズラも昨今咲初め居る」で初まつているのである。

#### 22. ヘクソカズラ (一名ヤイトバナ)

アカネ科の蔓植物で、左巻きときまつている。万葉集にすでに載つて居り、巻16に、

葛ばなにはひおほとれる尿葛

絶ゆることなくみやづかへせむ

とあり、古名はクソカズラと云つたのである。葉はサツマイモの葉に似て薄く小さく、対生で、葉間托葉がある。花は夏日葉腋に多数群がり生じ、鐘形で灰白色、内面は紫色である。子供等がよく此の花を取つて、灸の真似をするので、ヤイトバナとも云う。果実は秋季黄色に熟する径6mm許り、短根や蘆などにあつて、冬でも落ちない。此の実をそのままか、或は酒精に漬けて霜焼につけるとよく効くと云う。ヘクソカズラは今でもヘクサカズラと呼んでいる地方もあるか

らヘクサカズラから変つたものであろう。尻と糞と両方ではあまり残酷である。然し香いは人によつて非常にその感じが異なるもので、戦前の事であるから話は六分古いのであるが、六甲山の食堂に入った所が1つの食卓にヘクソカズラが活けてあつた。私が胴乱を下げていたので、サービスガールが、この花は何といゝますかと私に尋ねた。私はその臭を嗅がしてから答えた方が効果的だと考えたので、その葉を取つて嗅いで御覧と云つた。所がその葉を嗅いでその女の子は、あゝいゝ香いだわ、と云つたので啞然として仕舞つたことがある。

### 23. ママコノシリヌグイ (一名トゲソバ)

タデ科に属する蔓状の1年生草木である。和名は継子の尻拭いの意で、人道問題になりそうな、いやな名であるが、トゲソバの名は殆ど使はずマ、コノシリヌグイの方に断然人気があるのはどういふわけである。茎は2m以上にも伸びて、4稜をなし、稜上には著しい逆刺があつて、これで他物に鉤懸する。葉は略3角形で互生し、これにも逆刺がある。そんな所から継子の尻拭いの名が起つたものである。花は夏咲くが毬状に叢り咲いて、紅く綺麗なのは、花卉でなく粍である。

### 24. ハングシヨウ

水辺に生じ茎は直立して60~100cmに達し、葉は楕円形又は長楕円形で、長さ8~15cm、6、7月頃になると、梢葉2、3枚は白色を呈し、半面白くなるから半化粧の意味だと云う説と、半夏生の候に白色の梢葉を生ずるから半夏生だと云う説とある。多数水辺に叢り生えているのを見ると、大へん涼しそうである。全草に1種の臭気がある。花は白い葉に相対し穂状の総状花序を出し、多数の白色細花を着ける。ハングシヨウ科をなす。

### 25. チングルマ

チングルマは稚児車の転化だと云う。其花の可憐な有様をよく現している。バラ科に属し、本州中部以北の高山帯の陽地に生ずる矮生の小灌木で、高さ10cmに過ぎない草状の草本である。葉は奇数羽状複葉で小葉4、5対、花弁は3cm位で5枚白色、輪鉢形である。花後、オキナグサの様な果実を生ずる。7、8月頃白馬山の大池に行くと、チングルマの花の蔭にハコネサンシヨウウオの子が沢山遊んでいる。その取り合せが面白いので、表現は至つて平凡だが、

チングルマの蔭に遊げり山椒魚と歌句つて見た。

### 26. オニシバリ (一名ナツボウス)

山地に生じ、早春葉腋に黄緑花を簇生する。ナンテヨウグ科の植物で、鬼縛りの名はその樹皮の強靱性に

基く、雌雄異株で高さ1m内外、有毒な落葉灌木である。葉は秋に生じて夏落ちる。それで夏坊主の名もある。茎は灰茶色、葉は軟質で倒披針形である。果実は楕円形の漿果で、7月頃赤熟する。味は辛い。その樹皮を抄紙原料とする。筆者が初めてこの植物に接したのは大正4年、鎌倉の衣張山であつた。

### 27. ハゲシバリ

もう六分前の事であるが、東京の某大新聞の風樹語と云う欄に「禿滑」と云う見出しで、次ぎの様な記事が出たことがある。

前略、石山寺には紫式部参籠源氏の間と云う薄暗い一室があり、東面した窓際には、同女史の使つたと云う机の上に古ぼけた硯まで、鹿爪らしく載せてある。窓を押せば、遙かに勢多川を隔てゝ信樂の山々が丸い。その背を連ねて夢のように立並ぶ、直ぐ前に見えるのは、<sup>コノシ</sup>金勝山だ。一帯の山々は浅ましくもいたいたしい禿山になつている。藤原時代に濫伐した祟りが、今に禍しているという。風致を害する位ならまだいゝ、濫伐の結果は、年々洪水を持つて来る。何時も問題になり、知事の首切台と云はれている。南郷の洗堰なども其為めに出来たものだ。洪水から百姓一擧が起るようになって、当局も困りはてた。先ず金勝山一帯の禿山に植林を企てたが、文字通り赤裸々に骨髄まで徹した禿振りには、木の植えようがない。雨が降れば皆根こそぎ押流されて仕舞う。惨憺たる苦心の未見出したのが、禿滑りと云う木である。根が非常に強く、不毛嶺岩の間にもよく其の根を張り、少し位の雨では流されない。これを植えてから、当局、県民は幸じて安堵の胸を撫で下した」とあるのであるが、その肝心の植物が禿滑りでは、禿がさらに滑つて安堵処ではあるまい。これは禿縛りの間違いである。その効用は間違つていない。此の植物の正しい和名はヒメヤシヤブシで一名ハゲシバリと云う。山地の土砂崩潰を防ぐに適する植物であるから禿縛りと名付けたものである。それで砂防用植物として栽植される重要な種類で、六甲山などでも沢山植えている。ヒメヤシヤブシはハンノキ科の落葉灌木であるが、中には高さ6m、径30cmに達する喬木状のものもある。葉は長卵形で、葉縁には大小不齊の鋸齒がある。花は葉に先んじて4月頃に咲く。毬果は4、5個かたまつて下垂する。これに似た植物でオオバヤシヤブシと云う樹がある。六甲山などにも沢山あるが名の通りヒメヤシヤブシより葉が大きく、毬果は1つで上を向く。オ、バヤシヤブシの方は砂防の効力はあまりない。其の新開記事の最後に面白い事が書いてあつた「話はちと古い、青嵐永田秀次郎氏が警保局長時代、災害視察か何かの旅で江州え出張した時、端なくも此の禿滑り(筆者曰、こゝにも

滑りと書いてある)を発見した。その効能を聞いて喜んだ局長は、早速此の稀代の珍木を携えて帰京した。東京へ着くと直ぐ丁寧に荷造りし、1札を添えて発送した。贈られ主は誰だろう、時の内閣書記官長伯爵児玉秀雄氏、伯は金勝山を凌ぐ空闊不毛の禿頭所有者として隠れ無き人である」と出ているのであるが、禿が滑つたのでは贈つた意が通らない、禿を縛つてこそ贈つた誠意がある。

### 28. アブラチャン

一寸聞いただけで面白味を感じさせる名の木である。この植物は果実並びに樹皮に油を多く含み、能く燃えるので油とチャン(歴青)を合せて、名としたものであろうとの事である。多枝繁葉の落葉灌木で、山地に自生する。高さは4米位になり、樹皮は灰褐色を呈し、葉は互生して卵形或は楕円形。早春葉に先んじて、淡黄色の小花を簇生するクスノキ科の植物である。

### 29. カナクギノキ

この植物も金釘流を聯想させて面白いが、その名の起りは鉄釘の意と思うが、材は堅緻でないから不明であると牧野日本植物図鑑にある。どうもウツギの材のように木釘に使用する事も聞かないし、又鉄釘流に枝が曲つて居るわけでもなし、識者の御垂教を仰ぎたいものである。クスノキ科の植物で、本邦中南部の山地に自生する落葉の小喬木で、高さ凡そ5米、樹幹は直立し、樹皮は黄白色を帯び、老木では小片となつて剥げ落ちる。葉は互生で、帯赤色の短い柄を有し倒披針形全縁である。果実は漿果で、球状、径6mm位、10月頃赤熟する。

### 30. バリバリノキ(一名アオガシ)

此の植物もクスノキ科で、暖地の山地に生ずる常緑喬木である。尾鷲の矢ノ川のほりにもあつた。高さ5m~13mになり、枝は太く疎で且つ平滑である。葉は互生して葉柄を具え長大な披針形で硬質であるから葉と葉と触れるとぱりぱりと音がするので名付けられたものであろう。

### 31. カンザブロウノキ

此の植物も今夏尾鷲の矢ノ川流域で採つた、暖地に生ずる常緑の喬木で、高さ凡そ10m、幹径30cmに達し、葉は頗る繁密に着き、全株無毛である。ハイノキ科の植物、牧野日本植物図鑑に「和名は多分勘三郎の木ならんも其意詳かならず」とある。

### 32. ミミズバイ

これもハイノキ科の植物で、暖地に生ずる常緑の喬木で前者と同じく高さ10m位、幹径は30cm許に達し全株無毛である。葉は有柄で、狭楕円形或は楕円状倒披針形で、長さ10~15cm、平滑、全縁或は先端部に細鋸歯がある。ミミズバイの意味は、この植物はハイ

ノキの1種で、その実の形が蚯蚓の頭に似ているからである。

### 33. オオイヌフグリ

陽に咲いて瑠璃一と叢やいぬふぐり 輪水

作者は横浜一中に長く棒職して居られた箱根のシユウタロウグミの発見者、松野重太郎氏である。松野さんは晩年は、俳句指導もして居られた程俳句にも造詣が深かつた。この句は、オオイヌフグリの態をよく現はしている。外にイヌフグリと云う植物があるが、それは花が淡紅紫色であるから、瑠璃一叢と云はれない。オオイヌフグリは欧州原産の2年生草本で、路傍至る処にあり、3月頃から咲き始めるが、神戸地方ではもう1月に花を見掛ける処もある。そして夏まで咲き続ける藍色の可憐な花で、濃い藍色の条がある。その果実が如何にも犬の陰囊に似ているので、かく名付けられたものである。イヌフグリは本邦に古くから在つたもので実は小さい。オオイヌフグリは明治初年に渡来し、イヌフグリの実より大きいので大の字を冠せられた。明治20年頃にはまだ東京辺に非常に少なかつたと石川光春氏の「趣味の植物春秋」に出ている。筆者東京在住の大正の始め頃には、もう非常に繁茂していた。穴守稲荷に行く途など、早春には如何にも美しく叢り咲いて居り、一面に立て並べた海苔簀の子が、ぴりぴりと音を立て、乾いている景にいさゝか詩興を起し

いぬふぐり咲くや並み立つ海苔簀の子

と歌句つたことがある。オオイヌフグリと入れたのではどうにも句にならない。オオイヌフグリの葉は下部のものは対生し、上部のものは互生している。莖、花梗、莖共に細毛がある。

### 34. ジロボウエンゴサク

伊勢でスマレの事を太郎坊と呼び、これを次郎坊と呼んで、その花を互に引つけて引張り勝負をする。山足の多年草で、塊状の地下莖をもち、草丈17cm許り。繊弱で、葉は二回羽状複葉。春唇状紅紫花を開く。

### 25. スズメノテツボウ

水田又は路傍水湿の地に多数叢り生ずる越年性の、ごく普通なイネ科植物である。莖の高さ30cm内外で、5~8cm許りの穂を4月頃出す。雄蕊は茶褐色である。和名の意は小さく可愛らしいから、雀の鉄砲の意である。英名はFox tail grass。英語で狐尾草と云う事を「狐の尻尾草で叩いてやつた」と云うそうであるが、中々面白い。雀の鉄砲で打つてやつた、はどんなもんであろう。花言葉は道化、笑談を表はす。イ科にはスズメノヤリ、ヤマスズメノヤリ、高山にはタカネスズメノヤリがある。この辺で私の投遺の駄文を終ることにする。